石 匠

楠 勝平

原作・冬木 良

サクサク

屋

アッ

屋

どうなんだい具合は？

ええこんなふうだからやっぱりよくないの

そんなに困るといったようすもないのに医者にも診せないし縁者が近づかないのも

むしろ自分の方からそれを避けているふうなの

だって
借間人の
君が……
……

ゆくゆくは
……どうする
んだろう

もう
あまり
永くないわ

えっ

なぜ受賞を断った？
新聞社協会ではたいへんなあわてようだ
しかも理由がわからんてね……

ただ受けたくないの
ウン聞いた

なんど理由を尋ねてもその返事だってね
でもほんとうにそうなの

制作は読けてるんだろうね
画商の仲間うちでも次の作品をみんな狙っているらしい

もちろんやっているわ

ただ……あの人があんなふうだから……

紫摩子さん！

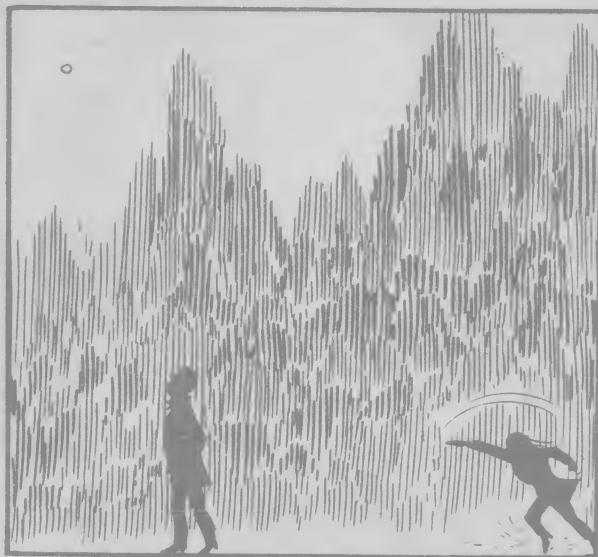
いったいどうなんですあの老人にあんまり甘えさせすぎていやしませんか

そのために自分の時間を奪われ犠牲になるのは問題じゃないですか
まして

君と老人とは
他人だと言うのね？

でも

いま
わたしが
あの家を
出たら
あの人は
困るわ

それに
あの人との間に
犠牲といった
ようなものは
ないんです

それじゃ
なんなのです
僕は君のこと
をほんとに
心配している
んだ

ええ
現に君はいま僕とこうしてこのような場所を選んで歩いている

過去にも
幾度かある
それもみんな
君があの老人
と関わっている
ことによるのだ
と僕は思う

ごめんなさい

どう
おじいちゃん
目まいは
？
ウーム
いまはいい

さっきな
頭がガンガン
したと思ったら
急に目のまえが
昏んじまって

それなのに
どうして
そのあとで
お酒なんか
飲まれたん
ですか!?
なあに
夏の死人は
逝くときは
よくやるんだ

屍臭を
ふせぐため
といってね

とくに土葬の
習慣が残っている
地方の農家なんぞ
では
死者が
出ても稲や
蚕から手が
離せない

それで
埋葬が七日
やそこら遅れ
ることが
あるんだ
それを死者は
知っているから
最期という
ときにそれを
呑む………
でも
いまは冬だわ
それに
この雪の・
なか……
わかるかね
わしは百姓
の生れなん
じゃ
ええ
うかがいましたわ
それで夏の陽差し
があんなに
お好きだった
ことも

花の種を
播いたり
草むしりをしたり
庭の土いじりを
なさっているとき
ほんとうに
生き生きと
楽しそう
だったわ

まったく
この夏は
よく遊んで
もらったね
あなたには
幾日も幾日も……

ええ
よくお話し合い
もしたわ
いろんなことを

思うのだ
が……

女房が仮りに
早く亡くならな
かったとしても
あんなふうな
ことを話した
かどうか……

それで……
わし自身を不審に思う以上に
あなたという人の不思議な力を思わずにはいられない

ええわたしもおじいちゃんにそう思うの
あんなふうに赤裸な心のままを言葉にできたことはないいし

これからもありそうには思えない

いつも
あなたの制作用の石筏を運んできてくれるあの山の黒牛はどうなのかね

あの人は無口だから殆どそんな会話をしたためしはないわ
なくてもすべてが通い合う二つの心というものはある………

黒牛を
愛してる
んだね
ええ
やっぱり
…………
だからこそ
あなたは
このわしに
魅かれたん
だ
受賞の
対象になった
あの作品の
老人も
従って
わしでは
なく
その
黒牛だ
ろう

ボン
ボン
ボン
ボン
ボン
ボン

ボン

黒牛………

おじいちゃん

音が聞こえる
えっ

雪の中を歩いてくる音が聞こえる

しっかりして！
おじいちゃん

柴摩子さん

そうですかそれはあなたもたいへんでしたね

はいこれからすぐに

あんなふうに葬儀まで区役所がやるものとは知らなかった

これも本人が生前に手配しておいたんです

本人が自分の葬儀をねえ
ええ

家を抵当にして借りた金でやってきたことも

こういう葬儀や埋葬のことまでご自分で考えられていたこともちっとも知らなかったんです

するとあの家やなんかはもう………
他人のものです

亡くなるすぐ前にあとのことはこの人にとおっしゃって
桜井さんという方がみんなやって下さるそうです

あなたご自身はそれでどうなさるんです？

もちろん
あそこには
いられないわ

アパートか
なにかを
探されるわけ
ですね？

……

で
ほんとうに
みんな預かって
下さるの

ギー…

いいですよ

あっ

こ、これは!!

コン
コン
コン
コン
コン
コン
コン

コーン
コーン

あれは……黒牛

こら!!

完